

～ 昨日の風 明日の風 ～
**経営コンサルタント
独白録**

【第51回】 経営の「リアリズム」を考える



戸敷 進一

1956年生まれ、宮崎県出身の経営コンサルタントで、㈱経営改善支援センター（福岡市、URL: <http://sien.co.jp/>）代表取締役。業種を問わない「組織活性化」の専門家で、全国300社以上の企業の活性化を指導。全国の商工会議所や企業などからの依頼で講演活動もおこなう。明確で分かりやすい表現で驚くほど短期間で「組織」を変えるのが強み。また、帝国データバンクの契約コンサルタントとして九州各地の企業を中心に多くの実績を上げている。

突然の衆議院総選挙が終わり、蓋を開けてみれば保守勢力が躍進し、リベラルと呼ばれる革新勢力が一気に力を失ってしまいました。マスコミでは「立憲民主党」が躍進したとまでしていますが、実際には「共産党」が議席を減らし、リベラル勢力が100議席くらいしかないという現実は大敗北としかいいようがありません。そうした現実をマスコミは伝えないので、ほんやりしていると現実を理解できず、他人の言葉に躍らされてしまうかもしれません。現実社会は「リアリズム」の世界ですから、どこかで冷めた思考や観点が必要です。他人の考えや感性で物事を判断することは危険です。特に経営は「地域性」「業界特性」「社歴」「構成員特性」などが根底にあるので単純な判断では済みません。

「休園日」の動物園

身近なところでリアリズムを学ぶ格好の場所があります。休園日の動物園です。動物園で飼っている肉食動物は時に生き餌を必要とします。肉食動物の本能である狩猟欲求を満たすために、動物園では休園日にウサギや鶏などをライオンやトラの檻に放ち食べさせています。ひよこなどは蛇や猛禽類の餌になります。外国の動物園では生きたままのヤギを檻の中に入れることもあります。これを残酷だと言っはいいけません。生きるとはまさに餌を獲得することであり、特に競争の激しい自然界においては命と命のやりとりが日常の姿です。日本の社会は成熟していますから、荒々しい生の自然の姿は隠す傾向にあります。幼稚園児に魚の絵を描きなさいと言ったら、魚の切り身を描いたという笑い話のよう

な話があります。芋や玉ねぎが木にぶら下がっていると本気で思っている子供たちも少なくありません。虫や魚を素手で触れない若者たちも多くいます。

小学校や中学校の遠足は休園日の動物園が最適なのではないかと本気で思っています。生きるというリアリズムを学ばせる場所としては最適だと考えます。組織の中で生きる、あるいは働くということもこうしたリアリズムから離れた場所ではうまくいきません。3年も経たずに次から次に離職していく若者たちの行動にもこうしたリアリズムの欠如があるのではないかと思います。「手に職を持たない中高年」がどれくらい大変な思いをしているのかというリアルな想像力が欠けているのです。

「ファンタジー」を排す

企業の経営も個人の生き方も、リアリズムから離れたところではファンタジーになってしまいます。ファンタジーは心地良いものですが、現実を動かすことはありません。総選挙が終わり、いよいよ「働き方改革」が本格始動します。長時間労働や残業時間の見直し、何よりも「36協定」の見直しにより労働環境の大幅な改革が始まります。「高齢者雇用」「同一労働同一賃金」「正社員非正規社員の格差是正」など企業にとって今まで考えてもいなかったような改革を組織内で進めていかななくてはなりません。時々「ハリーポッター」が好きな経営者がいます。呪文を唱え、杖を振ると世界が一変するファンタジー物語です。しかし、経営はファンタジーではありません。